

新幹線函館開業と東北—現代に必要なネットワークとは

本年3月に北海道新幹線がついに函館開業となる。北海道民としては、昭和39年に東海道新幹線開業して以来、待ちに待った念願の開通である。しかし、都市計画を専門とする我々は、その喜びに水を差すわけではないが、嫌われてもいから、問題を提起してこそ、学会の意味があると思う。

東北新幹線新青森開業時の出来事

2010年12月に私は忘れられない経験をした。新青森駅周辺整備委員長を務めていた私は、開業時に中央のマスコミに様々な取材を受けた。開業前日は、在京の某局モーニングショーのスタッフに、インタビュー収録を依頼された。インタビューの最初の質問は、「開業をいよいよ明日に迎えて、なかなか新青森駅周辺地区に商業ビルやホテルが建ちませんねえ」だった。私は「そうですね、そう見えますね。でも、もともとの計画では、ここは基本的に住宅地であって、青森駅周辺の中心市街地や、新幹線が通らない浅虫温泉、あるいは弘前方面等に出かけていってもらうためのものですから、当初の計画通りです。今後はそちらの交通ネットワークを含めた整備が必要になると思います」と答えた。

新青森駅は函館開業を想定して、中心市街地に入ってくるルートではなく、津軽半島を最短で走り抜けるための線路が敷設され、住宅地と農地の混在する周辺部に作られたのであった。インタビュアーは、合点がいったようで、「ああ、そうなんですか。今までの新幹線駅のイメージとは違っていいんですね」。そんなやりとりをして、ホテルを後にした。

オンエアの朝、その編集に唖然とした。「今回の東北新幹線青森開業時に新青森駅周辺の開発が進んでない状況について、どのようにお感じですか?」。上の文章と見比べて欲しい。「そうですね、そう見えますね。(以下しばらくカット)、浅虫温泉、あるいは弘前方面に出かけていってもらうためのものですから、(以下、しばらくカット)、整備が必要ですね」。

当該テレビ局だけでなく、おそらくどの局、どの新聞でも、たぶんシナリオは一緒だったと思う。新幹線の駅をつくったら、その周辺には、いくつかのホテルチェーンが進出し、誰もが知っている居酒屋が建ち並び消費者金融の支店が立ち並びなければ、開発されたと思わないのである。我々なら、中心市街地とのアクセスをどこまでリーズナブルにセットできるかが整備の成否を左右すると考えるのだが、そのようなマスコミの姿勢に、地元でも、八戸の八食センターのような施設をつくる

べきではなどという暴論が登場することになる。

問題のアウガを含めて、青森駅周辺には新鮮な海産物を扱う市場が存在している。観光客を重視するあまり車でなければ行けない新駅になぜ市民の台所をつくらなければならないのか。賢明な青森市の都市計画行政は、スタンスを変えずに、むしろ、青森駅を中心としたまちづくり委員会を設置して、本来やるべきコンパクトシティ行政を進めている。

「函館開業は新青森駅周辺開発にとって大打撃ですね」と、もしマスコミに聞かれたら、今度は編集しにくいように、「いや、そんなことないです。終点じゃなきゃダメなんですか?」、「なぜあなた方は、東京からの目線で終点と言うのですか?」、「青森から新幹線を使うという発想がないんですね、中央のマスコミは?」と細切れに答えたい。

函館開業を迎えて地方都市に必要な強い意志とは

新しくできる終点「新函館北斗駅」。函館駅との距離は、青森の比ではない。新青森駅の建設と同様の原理で、今度は札幌開業を見越した立地になっていることが一目瞭然である。

東京目線をいつまで地方は受け入れ続けるのであろう。札幌まで東京から5時間を切る。それをメインの目標にすることが本当に地方のまちづくりを救う切り札なのか。

新幹線を活かして、在来線との組み合わせ、あるいはこれまでなかったような経路のミニトリップを生み出せば、北海道と東北の楽しみ方はかなり面白くなる。たとえば、青森空港に降りた中国からの観光客が、バスで大間まで行き、島康子さんに会って、その後、フェリーで函館に移動。イカ刺しを満喫して、翌日新幹線で青森に帰り、中国に飛ぶ。このようなツアーがこれからきっと期待されるはずである。しかし、新ダイヤは、東北との密接性よりも、東京からの直通性に意識が奪われてしまっている。これまでと同様に、在来線が三セク化され、経営状況から便数が少なくなっていくと、そのような多様な楽しみ方をするための小さなネットワークアクセスが、新幹線のために脆弱になってしまう恐れがある。

誰のための新幹線なのか。北海道民は、釧路と札幌、帯広と旭川の間を身近にした方が、喜ぶのではないかと、つい思ってしまう。東北と北海道とをどう有機的に結びつけるか。そんな意識で私は函館開業を注視したい。地方のまちづくりにとって、東京との時間距離が第一義目的になることなど、これからはあり得ないだから。(文：東北支部長 北原啓司(弘前大学))